



職場での銃対策 ——米国テキサス州の大学で

すずき
鈴木

かずこ
和子

●テキサスA&M大学 社会学部 准教授/
イエール大学 社会学部 2017-2018客員准教授

日本のマスメディアで「アメリカは銃社会」という報道をよく耳にするが、これを「米国全土で銃が自由に流通し、銃規制が一律に弱い」と解釈をしている日本人がわりと多いことに最近気がついた。実際には、米国における銃規制は州によってかなり異なる。私のように色々な州の大学を移り渡って来た日本人にとっては、住んでいる州の銃規制がどうなっているのかは、「わりと気になる問題」であった。

しかし、テキサス州の中でもとりわけ保守的なテキサスA&M大学に移籍後は、銃問題は私の中で「気になって仕方がない問題」に格上げされた。保守派ブッシュ元大統領のお膝元で、かつ元CIA長官のロバート・ゲーツが学長だった大学である。教え子には、嬉々としてFBIやCIAをインターンシップ先や就職先に希望する学生が後を絶たないなどといえば、何となく察して頂けるのではないだろうか。

まず着任早々度肝を抜かれたのは、大学内部でのCadet（ミリタリー訓練生）の存在である。私のオフィスのあるビルの前の小広場には、彼らによってアメリカ国旗が掲げられ、そこでは頻りに軍事関連の儀式や訓練が行われている。仕事を終えたある夕方、ビルのエントランスを出てすぐのところ、迷彩服を着た一群に、掛け声と共に一斉にライフルを向けられたときには、口から心臓が出てきそうなほど驚いて、尻餅をついてしまったことがある。彼らは、クラスにも制服や迷彩服でビシッとキメて現れ、礼儀正しい。日常の訓練

に加え、近隣で災害が生じた場合は救助のため出動を要請され、中には戦争に行く学生もいる。彼らにとって、銃は特別なものではなく、日常の一部または延長線上にあるものなのだ。

我が家の郵便受けにもよく銃の特売チラシが入っている。それも、銃火器専門店のチラシだけではなく、ウォルマートなど普通のスーパーのチラシに、「〇〇ライフル ピンク・カモフラージュ柄 特価49.99ドル」とか「銃火器収納セーフティ・キャビネット 特価38.77ドル」などと写真付きで。何で銃がこんなに安いのだろうとか、銃のセールなんて有り得ないのではとか、日本人にとっては突っ込みどころ満載のチラシである。野菜・果物・洗剤といった日常的に消費するものと、銃を一緒くたにする感覚が理解し難い。こんなチラシは、銃規制が厳しいカリフォルニアでは、とんとお目にかかったことがない。やはりテキサスならではのところか。

ところが、「日本を離れて20年以上、テキサスの感覚には一生慣れることはないだろう」などという悠長な私の感傷は、2016年1月にテキサス州で施行された銃のopen carry（他人に見える状態での携帯）を認める法律によって吹っ飛ばされた。州立大学で教鞭をとる私にとって、銃問題はもはや死活問題となったのである。当時、アメリカ全土で銃乱射事件の頻発が大問題となり、大統領選を巻き込んで銃推進派と規制派が議論を戦わせていた。米国では、（発砲者も含め）1つの事件で4人以上を殺害または負傷させた事件は、銃乱射



(mass shooting) 事件と定義される。ちなみに、2015年度では372件の銃乱射事件が記録されており、被害者数は合計で1,870人、死者数は475人にもなる。ある調査では、2015年に米国国内の学校で起きた銃事件は64件と報告されている。そんな世情を背景とした、open carry の施行であった。更に、同年8月には、州立大学内での銃のconcealed carry (衣服の下やバックの中など他人に見えない状態での携帯) を認める法律の施行を予定していたので、これに関しては、さすがに多くの大学関係者が恐慌状態に陥った。教室で何故銃が必要なのかと、様々な反対運動が行われたが、法律の撤回には至らなかった。

昨年2016年の夏、concealed carry 施行直前は、「自分が職場での最初の犠牲者になるのでは」との不安から、毎日胃が痛んでまともに眠ることもできなかった。未だに奴隷制やジム・クロウ制度 (主としてアフリカ系アメリカ人の、一般公共施設の利用を禁止制限した人種差別制度) のメンタリティが色濃く残存する土地柄で、なんとか踏ん張っていた外国人やマイノリティの先生たちからは、「こんな状況では、自分の命を守る為には、生徒全員にA評価を出すしかないじゃないか」と絶望的な発言も出てくるようになった。特にテストの採点や評価を出す学期末には、A以外は受け付けないとか、落第を免れようと必死になる生徒が、様々な戦法を用いて先生に挑戦してくる (ここには、男性よりは女性の先生、白人よりはマイノリティの先生がターゲットになりやすいという、

米国の構造的な問題がある)。今、眼前にいる生徒がバックに銃を持っているかもしれないと疑いながら自分のオフィスでやり取りするのは、教育者としてかなり辛い。授業では、「ドクター・スズキ、心配しないで。教室で何かあったら、オレ、銃持ってるから守ってやるよ」などと好意から述べられる励ましも、逆に一層の不安を募らせる原因になったりする。同僚のアメリカ人は「所詮自分の身は自分で守るしかない」との境地に至るのだが、「お上が何とかしてくれないと」という日本人的思考がいつまでも抜けきらない私は、そこまで切り替えが巧くできない。

そんな中、大学主催の「無差別発砲者に備えるプログラム」(Active Shooter Preparedness Program) という講習会があることを知り、数少ない同じ大学の日本人女性の先生で、同様の悩みを持っている方と一緒に参加してきた。結論からいうと、無差別発砲を生き残るための三か条は「Run. Hide. Fight.」(逃げる・隠れる・戦う) で、これを段階的に実行せよとのことだった。最初の逃げる・隠れるという訓練をしたことの無い人には有用な情報かもしれない。ご興味を持たれた方は、ヒューストン市によって作成された、6分程度のビデオが You Tube でみられるので、いかがだろうか。

「Run. Hide. Fight.」～無差別銃発砲事件に巻き込まれた場合の対処法～
https://www.youtube.com/watch?v=tCEuKEIbB_M
(日本語字幕付き)